

[19]

氏名	飯田 華子 ^{いいた はなこ}
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第35号
学位授与の日付	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	朝鮮語의 禁止를 나타내는 ‘말다’에 관한 通時的考察
論文審査委員	主査教授 高明均 副査教授 松岡 雄太 副査教授 玄 幸子 専門審査委員 教授 五十嵐 孔一 (東京外国語大学大学院)

論文内容の要旨

飯田華子氏の博士学位請求論文「朝鮮語의 禁止를 나타내는 ‘말다’에 관한 通時的 考察」（和文題目：朝鮮語の禁止を表す‘말다’に関する通時的考察）は、下記のような全六章と、参考文献、付録（1, 435 個の用例）から構成されている。

第一章：序論

第二章：理論的 背景

第三章：‘말다’의 統辭的 特徴

第四章：‘말다’의 使用 環境

第五章：諺解文에 나타나는 ‘말다’와 原文의 語彙

第六章：結論

参考文献

Abstract

付録：世紀別(15世紀～19世紀)用例データ

朝鮮語において、禁止を表す語である ‘말다’ は否定表現や命令表現の中の一つとして扱われ、本用言と補助用言の二つの機能を持つ語である。一般的に、体言が先行する場合は本用言としての機能を果たし、補助的連結語尾が先行する場合は補助用言としての機能を果たすとされている。一方、実際の例文、特に 15 世紀から 19 世紀の文献では、これ以外の先

行形態も存在し、‘말다’を先行形態によって本用言と補助用言のどちらかであると判断することは難しい。また、‘말다’は聴者に対して禁止を表す語であるが、「禁止表現」は話者の意志を強く表す表現であるため、聴者（特に目上の人や親しくない人など）との関係性を考慮した際、使用には難しさが伴う。

本研究は‘말다’の統辞的特徴を、本用言と補助用言の二つの観点から通時的に明らかにすると同時に、‘말다’の使用環境を先行用言との関係の観点から明らかにすることにより、禁止表現の中での‘말다’の具体的な使用法の提示に繋げていこうとするものである。以下、各章の内容を略述する。

第一章では、本研究の目的と考察対象である禁止表現の定義について述べている。そして、否定表現、命令表現、禁止表現の各表現内での‘말다’の位置づけについて、先行研究の内容を整理した。その中で本研究とその目的が類似する先行研究の内容を整理している。最後に本研究の考察対象を提示している。

第二章では、本研究で参考にした文法化理論と義務のモダリティ、そして禁止の機能について整理した。一般的な補助動詞の文法化理論を参考にしつつ、‘말다’に関する文法化の基準を提示した。義務のモダリティは、モダリティの体系を整理し、義務のモダリティがどのような文に表れているのかを提示した。禁止の機能は、予防的禁止と制止的禁止の機能について先行研究をもとに説明し、禁止表現の成立条件を整理した。また禁止の詳しい機能についても紹介した。文法化理論をもとにした考察は第三章で主に扱い、禁止の機能に関する考察は第四章で主に扱われる。

第三章では、禁止を表す‘말다’が使われる文の統辞的特徴について考察している。‘말다’が補助用言として使われているのか、本用言として使われているのかを明らかにするため、‘말다’の先行形態を補助的連結語尾、名詞、その他の形態に分け、各形態の文を詳しく考察している。まず、先行形態として補助的連結語尾が現れた場合について、強調要素の結合様相では、助詞と副詞の結合様相を中心として考察したが、他の補助用言と違いを見せており、‘말다’に本用言的な性質が残っていることを明らかにしている。文の終結法の様相では、すべての文で命令形（一部で勧誘形）が使われていることから、すべての文において‘말다’がモダリティを表していることを確認している。先行要素においては、すべての先行要素に[行為性]を確認している。次に先行形態として名詞が現れた場合について、強調要素の結合様相では、助詞と副詞はともに、他の本用言と違いを見せており、‘말다’の補助用言的な性質、つまり、先行する名詞において、‘-./하’が省略された可能性を明らかにしている。文の終結法では、すべての文で命令形が使われていることから、すべての文において‘말다’がモダリティを表していることを確認している。先行要素においては、ここでもすべての先行要素に[行為性]を確認している。最後に先行形態としてそのほかの形態（名詞形、副詞形、‘-게’、‘-(으)려고’、‘-아/어’）が現れた場合について、それぞれ具体的に‘말다’の機能を提示している。名詞形、副詞形、副詞形としての‘-게’の形態が‘말다’に先行した場合の‘말다’は本用言の特性に近い性質をもつことを明らかにし、19世紀までの出現を確認している。使役形としての‘-게’、‘-(으)려고’、‘-아/어’の形態が‘말다’に先行した場合の‘말다’は補助用言の特性に近い性質をもつことを明らかにし、

このような文における‘말다’の前での‘·다/하다’の省略現象について明らかにしている。また、現代語では‘말아 주-’や‘말아야’という形態について別途考察し、このような形態が現れた文における‘말다’は、本用言に近いということを明らかにしている。

第四章では、禁止を表す‘말다’の使用環境について、話者と聴者の関係と、禁止の対象行為の観点から考察している。話者と聴者の関係を相対敬語の等級によって三つの類型に分け、各状況での敬語による語尾の様相と、禁止の対象行為を中心に考察している。ここで明らかにしていることは以下の三点である。一つ目、地位の高い相手には、19世紀までは·쇼셔体が、現代語では하십시오体や해요体が使われた文を中心に考察しており、このような文ではほとんどにおいて主体尊敬が使用されていた点、禁止の対象としては心理的活動を表す用言が多く現れた点を明らかにしている。二つ目、地位は低いが尊敬の対象となる相手としては特定の相手に対してのみ使われる語尾として하오体や하계体が使われた文を中心に考察しており、このような文では一部において主体尊敬が使用されていた点、禁止の対象としては抽象的な行為を表す用言や具体的な動作を表す用言が多く現れた点を明らかにしている。三つ目、地位の低い相手には19世紀までは·라体、現代語では해라体や해体が使われた文を中心に考察しており、このような文では主体尊敬は使用されていない点、禁止の対象としては具体的な動作を表す用言が多く現れた点を明らかにしている。その他にも、‘말아 주-’という表現は、地位の高い相手に対して使われ、主に具体的な動作を表す用言を禁止の対象とすること、‘말아야’という表現は、地位の低い相手に対して使われ、主に具体的な動作を表す用言を禁止の対象とすることを明らかにした。

第五章では、‘말다’と他の否定を表す語との区別について考察している。‘말다’は原文において、一つの漢字(‘不’、‘休’、‘毋’、‘勿’、‘莫’、‘無’、‘弗’)から成る語で表されたり、二つ以上の漢字から成る語で表されたりと、多様な語彙によって現れており、その中には、他の否定を表す語である‘아니’や‘못’に諺解されたものも確認している。このような否定を表す三つの語(‘아니’、‘못’、‘말’)の比較により、‘아니’、‘못’、‘말’は意味的に区別されて諺解されていた反面、一部において似た意味を持って使われていたことを明らかにしている。

第六章では、各章をまとめ、本論文の結論を述べている。また、朝鮮語の禁止表現における‘말다’や周辺の禁止を表す表現において、研究の意義及び今後の課題について述べている。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：高明均、松岡雄太、玄幸子各教授）は、飯田華子氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、（１）必要単位（10 単位）を取得済みであり、（２）博士論文のテーマと関連する分野で、論文 3 編（うち査読付き国際誌掲載論文 1 編、査読付き国内誌掲載論文 2 編）、（３）口頭発表 4 回（うち国際学会 2 回、国内学会 2 回）を有し、（４）博士論文聴聞会（2022 年 6 月 4 日）も終え、論文提出のすべての要件を満たしていることを確認した後に、研究科委員会（2022 年 7 月 27 日開催）に報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて 2022 年 9 月 27 日に飯田華子氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2022 年 10 月 26 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：高明均、副査：松岡雄太、副査：玄幸子各教授、学外委員：五十嵐孔一東京外国語大学教授）での審査に入った。同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員での論文開示も行った。

提出された朝鮮語論文（本文 157 頁、付録 48 頁、総頁 205 頁）は、15 世紀から 19 世紀までの文献から抽出した 1,435 個の用例と、現代語コーパスから抽出した 13,262 個の用例を対象とし、辞書や各種データベースも駆使し、綿密に検討していた。また参考文献にも記されたように、朝鮮語を対象とした研究以外にも、日本語や他の言語を対象とした研究成果も取り入れている。これらの大量の文献・資料を分析し、朝鮮語の禁止を表す‘말다’が使われる文において、統辞的特徴と先行用言と意味の関係性を明らかにすべく研究を重ね、問題意識に対する研究手法の堅実さから評価に値する。さらに、以下の四点からも本論文が優れたものであると判断することができる。

- （１）15 世紀から 19 世紀までの文献（用例総数 1,435 個）と、現代語コーパス（用例総数 13,262 個）を対象とし、現代語だけではなく、通時的な観点から語と文を考察している点
- （２）これまでの‘말다’に対する辞書等の説明を再検討しており、‘말다’の品詞的屬性に関して、文の統辞的特徴から細かく分類して考察し、分類ごとに具体的に提示している点
- （３）‘말다’の使用環境を、禁止対象行為との関係という新しい観点から考察したことにより、今後の「禁止表現」に関する研究の発展に寄与するものである点
- （４）考察結果は、今後、朝鮮語における禁止表現の教育にも発展する可能性をみる点

以上により、飯田華子氏の論文が、研究の方法や考察の内容、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準に達していることを、審査委員会一同が認めた。